
予言

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

予言

【Nコード】

N8406F

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

奥野実は学校で古代マヤの予言で人類がもうすぐ滅亡すると思っていた。ところが実際は。実際十年位前の予言の本を読んでみるとかなり笑えます。

第一章

予言

奥野実は悩んでいた、その悩みは本から来ていた。

「もう駄目なんだよ」

クラスで自分の机に座り込み頭を抱えていた。

「もう。終わりなんだよ」

「何がだよ」

「何が終わりなんだよ」

「世界がだよ」

こう皆に答えるのである。

「世界が終わるんだよ」

「あんた何言ってるのよ」

彼のこの言葉を聞いた皆の中で一人出て来た。小柄でおかつぱの目が少し細い以外はまあ可愛いと言ってもいい女の子である。

「何で世界が終わるのよ」

「宇宙人が来てだよ」

「宇宙人!？」

女の子は彼の宇宙人という言葉聞いて眉を顰めさせた。

「何で宇宙人が世界に来るのよ」

「上林、知らないのかよ」

実はここで彼女の名前を呼んだ。彼女の名前は上林泰子という。

実のクラスメイトである。クラスではまとめ役の一人として知られている女の子だ。

「古代マヤの予言であるんだよ」

「古代マヤの?」

「そうだよ。そこではつきり書かれてるんだよ」

こう力説する実だった。

「世界はもうすぐ滅亡するってな」

「宇宙人が攻めて来て？」

「そうだよ。奴等はもう来ているんだ」

拳句にはこんなことを言い出してきた。

「もうすぐそこに。だから世界は」

「滅亡するって言いたいよね」

「そうだよ。終わりなんだよ」

また滅亡を口にするのだった。

「世界はな。もうこれで」

「何かわからないけれど滅亡するっていうのはわかったわ」

「わかったか、もう終わりなんだよ」

「ええ。それにしてもまた何でこんなこと言うのよ」

「この本だよ」

泰子に伝えて机の中からある本を出して来た。見ればそれは予言に関するものである。古代マヤの三千年の予言と題する本である。

「この本に書いてあるんだよ。世界は滅亡するってな」

「予言になのね」

「読んでみるか？」

「ええ」

とりあえず彼の言葉を受けて頷いた。

「読んでみるわ」

「ここに書いてある予言は外れたことがないんだよ」

実は真つ青な顔で力説してきた。

「それこそな。全然な」

「それはまた凄いわね」

「だからなんだよ」

また言う実だった。

「世界は終わるんだよ」

「わかったから。読めばいいのよね」

「ああ、そうだ」

必死な声だった。

「読んでくれ。わかったな」

「わかったから。借りるわよ」

「ああ、読めばわかるからな」

こうして泰子もその予言の本を読むことになった。だが学校では読まず家に帰って読むことにした。晩御飯の後片付けの後でお茶を飲みながらゆっくり読もうとすると。その横から彼女の兄の賢治が言ってきたのだった。

「おい、また変な本読んでるな」

「友達から借りたのよ」

こう兄に返す。見れば彼は漫画の週刊雑誌を読もうとしているところだった。その横にはポテトチップとコーラをスタンバイさせている。

「読めばわかるとか言って」

「読めばって。そういえばよ」

「どうしたの？」

「その作家の本俺結構持つてるぜ」

こう言って来た兄だった。

「結構な」

「持つてるの」

「ああ、ちよつと待つてろよ」

次に彼はこう言ってその場から消えた。そうして暫くして数冊の本を持って来た。見ればそれは。

「この作家だろ？」

「ええ、そうだけれど」

作家名は木林勉という。何かしらおどろおどろしいタイトルの本ばかりだ。しかもどれもこれもが予言の本だからかなりのものだ。

「こいつな、馬鹿なんだぜ」

「馬鹿って？」

「読めばわかるよ」

妹に対して言う兄だった。

「馬鹿じゃなきや電波だな」

「電波なの」

「とにかくここにある本全部読めばわかるからな。斜め読みでもいいからな」

「斜め読みでもいいの」

「ああ。どっちにしる中身もあまりないからな」

少なくともファンの物言いではなかった。見れば持っているその本はどれもかなり乱れている。どうやら大事に扱うというつもりもないらしい。

「読んでみなって」

「わかったわ。それじゃあ」

兄の言葉に従い実際にその本を全部読んでみた。その間彼女は笑い転げることしきりだった。夜遅くまで腹筋を鍛えた後で学校に行った。そして昨日と同じく落ち込んでいる実のところに行っていたのだ。

第二章

「ねえ奥野」

「何だよ」

「これ、読み比べてみて」

笑いを必死で抑えながら彼に兄が持っているその本を出した。ついでに彼から借りていたあの本もだ。これは返すからである。

「全部。いいわね」

「全部って」

「斜め読みでもいいから」

この辺りは兄の言葉の受け売りである。

「だから。読んでみて」

「それで世界が終わらないのかよ」

「いいから読みなさいって」

今度の言葉は少し強くさせた。

「わかったわね」

「わかったよ。それじゃあな」

「ええ。読んで」

言葉を一転して柔らかくさせて本を差し出して読ませた。こうして彼はその本を読み出したがその顔が見る見るうちに変わりだした。そうして言うのだった。

「な、何だよこれって」

「わかった？」

「わかったも何も」

まさに目を皿のようにさせての言葉だった。

「何だよ。本によって言ってることが全然違うじゃないか」

「しかも同じ予言でね」

「しかもこの本だと」

賢治が出した本のうちの一冊を出して泰子に言う。

「人類は隕石で滅亡するってことになってるじゃないか」

「他の本では謎の伝染病になってるわよ」

「ああ、確かに」

読んでみればその通りだった。

「何だよ、しかも」

「そうでしょ。予言されていたって絶対に後で言ってるでしょ」

「そうだよな。見れば」

そうなのだった。あとになって予言されていた、この表現ばかり目立つ。考えてみれば実に奇妙なことなのだ。何故なら既にわかっている筈のことだからだ。

「そう言っただけだよね。それでそこから」

「この予言は絶対に当たるって書いてるわよね」

「ああ」

これもその通りなのだった。泰子の言葉の方が遥かに的確であった。

「いつもそうなるな、確かに」

「しかもよ」

泰子は実にそのことを指摘してからまた言うのだった。

「それから色々と言うじゃない」

「あれが起るこれが起るってな」

「けれど昔の予言の本だと」

ここで出て来るのが昔出ていた予言の本である。そこを読むとこれまた実に面白いことがわかるのだった。まるで奇術のトリックがわかるように。

「ほら、全然外れてるわよね」

「ええと、巨人が優勝するか」

見ればそんな予言もあった。

「しかも堀内の下で黄金時代だって!？」

「外れてるわよね、完璧に」

「あいつクビになったじゃねえか」

こう言い捨てる実だった。

「負けまくってな」

「ヘボ采配でね。まあ巨人が負けるのはね」

「そりゃいいことだからな」

巨人が嫌いな彼等にとつては外れて万々歳の予言であつたのだつた。そのことを隠しもせずに話を続ける。

「それでしかも」

「北京オリンピックで未曾有のテロか」

「当たった？」

「当たってねえよな。全然な」

「そうでしょ」

チベットへの一連の抗議だけだった。そこまで至っているとは到底言えなかった。やはりこの予言も外れていると言えるものであつた。

「じゃあこれも外れね」

「そうだな」

「ブッシュ大統領暗殺は」

「映画の中だけだな」

あくまでそれだけであつた。

「勿論これも」

「外れよ」

「そうだな」

従つてこれも消えたのだった。次は。

「今度は富士山の噴火かよ」

「噴火してないわね」

「俺が今やってるゲームじゃ噴火するぞ」

桃太郎電鉄のことである。

「それと怪獣も出るな」

「ああ、そういえば怪獣が出るって予言もあるじゃない」

よく見ればそうなのだった。昔の本も今の本も好き放題書いてい

るのだった。この辺り実にいい加減な作者であることもわかる。

「これは勿論」

「外れか」

「他にも色々書いてあるわよね」

それだけ適当に書き散らしているということだった。

第三章

「けれど全部外れてるでしょ」

「そうだよな。じゃあ絶対に当たるんじゃないんだな」

「それどころか全然当たっていないじゃない」

「泰子はこのことをはつきりと指摘したのだった。」

「昔の本に書いてあることって」

「何だよ、こんなもんだったのかよ」

「そのことがわかって拍子抜けしたような声をあげる実だった。」

「全くよ」

「私も昨日笑ったわよ」

今度は笑みを浮かべて話す泰子だった。

「もうね。あまりにも酷いから」

「よくこんなので本書けるよな」

「言った者勝ちってことじゃないの？」

中学生にしては大人びた泰子の言葉だった。だがこの年頃の女の子の言葉だと考えれば相応ではあった。生意気な感じもしないわけではないが。

「こういうのって」

「本当にいい加減だな」

「そのいい加減な本を信じられる？」

「ここで実に対して問うてきた。」

「あんた。そこんところどうなの？」

「いや」

泰子のその問いには首を横に振る実だった。

「そんなわけねえだろ」

「じゃあ答えは出たわね」

「ああ」

自分の持っている本のカバーをつまらなそうな目で見ていた。

「そうだな。全く、騙されたぜ」

「これからは予言は信じないわね」

「っていうか笑えるな」

こう言うのだった。

「こうして読んでみるとな」

「そうね。確かに」

今の実の言葉には素直に笑うことができた泰子だった。

「あまりにも滅茶苦茶だからね。言ってることが」

「何かよ。俺思っただけだよ」

「何を？」

「いやさ、この本の書いてること適当にばらすだろ」

こう泰子に言う。

「そうしてそつからつなぎ合わせたら意味わかるのにな」

「まあわからないでしょうね」

泰子は彼のその考えを聞いてすぐにこう返した。

「ただでさえ滅茶苦茶な内容なのに」

「やっぱりそうなるか」

泰子の言葉にまた納得した顔で頷いた。

「こんな内容じゃな」

「それでその本どうするの？」

「これか？」

「ええ。もう信じていないでしょ」

またこのことを実に話す。しかし先程とはその言葉のニュアンスが変わってきていた。

「それだったら。捨てるの？」

「いや」

だが実は康子のこの言葉に首を横に振るのだった。

「捨てはしないさ」

「勿体ないから？折角買ったから」

「面白いからだよ」

笑つての言葉だった。その笑顔は泰子と同じものになっていた。

「こうしてみるとな。面白いよな」

「そうでしょ。それはね」

伊達に彼女も夜遅くまで笑い転げたわけではなかった。このことはよくわかるのだった。

「まだ腹筋痛いし」

「そうだよな。じゃあこれからは」

「どうするの？」

「予言じゃなくてギャグだと思って読むことにするぜ」

先程までのつまらなさそうな顔は消えていた。そのかわりに楽しむ笑みになっていた。

「思う存分な」

「そうね。そっちの方がね」

「面白いからな」

「じゃあ今度からはそうやって読むのね」

「怖がるより笑う方がいいしな」

本の表紙を笑いながら見ている。

「そうするさ」

言いながら本を開きだす実だった。そこには先程までの恐怖で震えるものはなかった。そして読むにつれ笑みを深めていくのだった。秘密がわかればどうということはないことであつた。どれだけ恐ろしいことが書いてある本も。

予言 完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8406f/>

予言

2010年10月8日15時31分発行